四國新聞
2023年（令和5年）2月6日（月曜日）

元香川大学長の脳神経外科医

長尾省吾さんが新刊

宗教観や遍路体験まとめる

40年以上、脳神経外科医として臨床医療に携わり、香川大医学部付属病院長、同大学長を務めた長尾省吾さん(80)＝高松市中央町＝が、自らの宗教観や四国遍路の体験をまとめた「医師に宗教は必要か―私の四国遍路旅から―」を出版した。

第一章は、第七十一番札所の弥谷寺（三豊市）の麓に生まれ育った少年期の思い出から、生死の境に立ち会うことも多い脳神経外科の医師として働いた経験について述懐。長年の修練で「よりよく生かすこと」は習得できるが、「よりよい死を迎えること」を病める人と共有するためには、医師にこそ宗教心が必要だと気付いたとしている。

第二章では遍路の旅姿や作法に込められた意味を解説し、10回に及ぶ自らの遍路旅の中で感じた苦難や楽しさについて回顧。脳の神経細胞の働きからも、一つの課題に集中したときより、遍路旅の中で心がふと「空」になったときに解決策や次の一手が浮かびやすいという実感も明かしている。

病院を退職後四国遍路を始め、現役の頃にこれらのことに気付いていればと悔やんだという著者。自省も込めて、宗教に関する教育が、これからの医療倫理や終末期医療教育の中で必須だと指摘する。A5判、76ページ。

（美巧社刊、1100円＝税込み）

「医師に宗教は必要か―私の四国遍路旅から―」の表紙